

## 散文の学としての源氏物語・テキスト論と近世源氏学の接点

—「若紫」巻の冒頭の設定を端緒に

東原伸明

## はじめに

玉上琢彌の著述に見られる思考方法を端緒に、一九八〇年代テキスト論の方法と近世源氏学との接点について、散文の学問という観点から補助線を引いてみたいと思う。

玉上の分析によれば『源氏物語』『若紫』巻の冒頭の言説は、『伊勢物語』初段の設定をことごとく「正反對」に引用したものであるとしている（後述）。この驚嘆すべき指摘は、およそ二十年のタイムラグを経て後に三谷邦明によって批判的に継承されることで、テキスト論を展開することに繋がってゆくのである。『源氏物語』の成立から享受という過程のおよそ千年の歴史を振り返ってみる時、玉上以前にこんな斬新な読み方をした者はいなかったのではないだろうか。ある意味ではまったく風変わりな説としてしか受け止められなかっただろうから、テキストという考え方が導入されるまでは光が当てられることはなく、等閑に付されてきたのだ。つまり、テキスト論の導入以前には、玉上のなしたことは、まったく正当に評価されなかったと思われるのである。その意味において、テキスト論の思想と玉上の学問とは同調したものである。

しかし、なぜ彼にはこんなにも独創的読みができたのであろうか。小稿では玉上琢彌の学問に、近世の源氏学、具体的には萩原廣道の『源氏物語評釈』の術語の革新的な応用があったのではないかという方向から論を展開してみたいと思う。

## 1 テキスト論の導入—関係性による意味生成の自覚

散文学の『源氏物語』は、一九八〇年代にテキスト論の導入と実践によって意味生成に関する、コペルニクス的な転換が起こった。従来文学の意味というものは、作家（作者）によって執筆された「作品」じたいに込められており、方法を講じることで客体的に抽出できると考えられてきた。つまり、作品に「在る」意味を解読するという考え方である。ところが、一九八〇年代にテキスト論が導入実践されると、意味というものに対する考え方が、一変させられる。「作品」じたいに客体的な意味が在るわけではなく、読み方や読み手の側立場の違い、読者のスタンスの取り方、関係性の違いによって意味は多義的に現象することが理解されるようになる。すなわち意味は在るわけではなく、読み方次第で多義的に生成するのである。「在る」意味の解読から「成る」意味の分析へと、パラダイムの転換がなされた。移入されたジュリア・クリステヴァ（Julia Kristeva）の間テキスト性（インターテクスチャリティ、intertextuality）の概念とは、「あらゆるテキスト（text）は、それ以前に存在するテキスト（＝典拠、pretext）の引用と変形にはかならない」（J・クリステヴァ『セメイオチケ』という理論による）。

これを『源氏物語』の意味生成にあてはめると、以下のようにいえるだろう。作家紫式部の全執筆活動（仏écriture、英writing）を通して、彼女の意識から意識下の全領域における典拠の引用により織られた織物（テキスト）、そこそが作品としての『源氏物語』の成立なのであると。それを享受することは、読者による再度の引用行為として位置づけられる。すなわち読者の主体的な読み（レクチャー、仏lecture）によって、典拠たるプレテキストが『源氏物語』のコンテキスト（context）に重ね合わせられ、その際ズレが生じる、つまり引用と変形によって、それは

新たな意味が生成されたものと理解されるのである。典拠とされるプレテキストの織られ方、重ね合わせられ方の差異により、意味はそれぞれに変化して多義的に生成するのである。

このようなテキスト論の考え方が導入される以前の、実体的・個体的な作品概念においては、その作物じたいに「在る」意味を探究することが最大の目的とされてきたのである。しかし、関係概念による構造主義、構造分析の考え方を通過することによって、意味は関係性によって生成するのであり（関係性の産物）、作物自身に絶対的な意味はないことをテキスト論の実践から我々は学習した（1）。さらにその「構造」という考え方の科学性Ⅱ一義性じたいが、前掲クリステヴァのテキストの複数性（多義性）の指摘により批判がなされ（テキスト論Ⅱ記号破壊論）、文学の意味は、人間の主体的な読みを介してのみ、多義的に生成することが明らかになったのである。関係性の視座からなるテキストの概念においては、作物同士の対話によって、読者は「成る」意味（意味生成）を自覚的に受けとめることになる。したがって当該コンテキストに重ね合わせる典拠・プレテキストが異なればまた、生成する意味も違ってくるという理屈になる。それが、「読み」であり、スタンスの違いということなのである。

## 2 「若紫」巻冒頭の設定と関係性としての『伊勢物語』引用

「若紫」巻の冒頭は、次のように叙述されている。

瘡病にわづらひたまひて、よろづにまじなひ、加持などまゐらせ  
らせたまへどしるしなくて、あまたたびおこりたまひければ、ある  
人、「北山になむ、なにがし寺といふ所にかしこき行ひ人はべる。

去年の夏も世におこりて、人々まじなひわづらひしを、やがてとどむるたぐひあまたはべりき。ししこらかしつる時はうたてはべるを、疾くこそそころみさせたまはめ」など聞ゆれば、召しに遣はしたるに、僧「老いかがりまりて室の外にもまかです」と申したれば、源氏「いかがはせむ。いと忍びてものせん」とのたまひて、御供に睦まじき四五人ばかりして、まだ暁におはす。

（小学館新編日本古典文学全集 ①199頁。以下、内話文にへ）を付すなど本文の加工は引用者）

今日においてもあるが、大方の読者は「若紫」巻は『伊勢物語』の「影響」によって書かれていると理解しているのではないだろうか。たとえば、小学館新編日本古典文学全集、「若紫」巻の解説には以下のように記されている。

巻名 「若紫」は、春、萌え出た紫草。紫のゆかりに執心する源氏の歌「手に摘みていつしかも見む紫のねにかよひける野辺の若草」による。巻名によって『伊勢物語』の初段の影響を暗示。（以下略）

しかし、「影響」とは、とても曖昧でいい加減なことばである。問題は、どのようにどこまでが「影響」されており、果たしてどこからが『源氏物語』自身の独自性なのかはよくわからない。またその「影響」を及ぼしたとされる『伊勢物語』の初段は、次のように叙述されている。

むかし、男、うひかうぶりして、平城の京、春日の里に、しるよしして、狩に往にけり。その里に、いとなまめいたる女はらから住みけり。この男、かいまみてけり。おもほえず、古里にいとほしたなくてありければ、心地まどひにけり。男の着たりける狩衣の裾

を切りて、歌を書きて遣る。その男、しのぶずりの狩衣をなむ着たりける。

春日野の若紫のすり衣（すゐも）しのぶのみだれかぎり知られず

となむ、おひづきていひやりける。ついでおもしろきこともや思ひけむ、

みちのくのしのぶもぢずり誰（たれ）ゆゑにみだれそめにし我ならなくに

といふ歌の心ばへなり。むかし人は、かくいちはやきみやびをなむしける。

（新潮日本古典集成 13・14頁）

この両者の関わりに関して、玉上琢彌は次のように述べている。

『伊勢物語』『初冠』の段との違い

『伊勢物語』の初段、「初冠」の段では、男が、初冠して、「奈良の京、春日の里に、しるよしして、かりに」行ったのである。こちらの主人公は、「わらはやみにわづらひたまひて」それをなおしに、北山に行く。京から南の「奈良の京、春日の里」に対し、京の北山である。ちょうど反対だ。春日の里は、春日野と、あの段の歌にもある。北山の奥に行くのは、正反対である。

「狩り」は、健康な人の遊び、スポーツである。こちらの主人公は、病氣、なおりにくくて困ったあげく、京を離れるのである。正反対である。

『伊勢物語』の「初冠」の段では、美しい姉妹が登場する。男の行く先、春日野に住んでいるのだ。それを偶然、見て驚くのである。こちらの主人公は、はじめから人を訪問にゆくのである。めあての人は、「行ひ人」、「老いかがまりて、むろのともまかです」という老僧である。

で、はいは、まるで違う。むしろ正反対だ。それにしては、なぜ若紫と題し、『伊勢物語』を読者に思い出させようと、作者は、したのか。作者は、むだをしない人。正確な計算をする人である。だから、読者は期待する。この謎は、いつか、とけるであろう、と。

（玉上琢彌「若紫」『源氏物語評釈 第二巻』角川書店、一九六五年、30頁。ただし、傍点は玉上、傍線は引用者）

驚くべきことにこの分量の批評文の中で、「反対」の語が一例、「正反対」の語が三例も用いられており、まさにキーワードとなっているといえるだろう。そして玉上は、「それにしては、なぜ若紫と題し、『伊勢物語』を読者に思い出させようと、作者は、したのか」と述べている。玉上の思考に沿って述べるならば、読者に『伊勢物語』初段の設定の「反対」あるいは「正反対」として「若紫」巻を、その関係性において理解すべきことを説いていることになるだろう。つまり、既成の注釈書類が説くような『伊勢物語』の「影響」において書かれているとか、「暗示」しているなどという解釈とは一線を画しており、むしろ先行する『伊勢物語』初段が明示されていると言っているのである。「影響」という術語は、曖昧なことばで、対象との同一性（＝類似性）しか指示しておらず、先行する作品との関係的な差異はまったく考慮されていない。

対して玉上の読み方は、『伊勢物語』『初冠』の段との違い」という見出しが明示しているように、『伊勢物語』初段が踏まえられていること、同一性が指摘されているとともに、それがどのような関係性において踏まえられているのかということ、つまり「反対」あるいは「正反対」という関係的な「違い」＝差異性をも説かれているのである。差異性は、『源氏物語』の「若紫」巻自身が独自に創造した部分であるということになる。だからこれは、クリステヴァの間テクスト性の考え方と転一步の発想だといえるだろう。

当該玉上の見解が公表された一九六〇年時代、思想パラダイムの主流は、「実存主義」の哲学を典型とする個体論（実体論）であり、関係性を旨とする「構造主義」の哲学が広く世界に普及する以前の思想状況であったはずである。だから、これは特筆に値することである。そこからいえることは、玉上琢彌の思考方法は、関係性の哲学に拠っていたということになる。

さて玉上の説を批判的に継承する三谷邦明は、次のように述べている（2）。

若紫巻は、まず玉上琢彌が指摘しているように伊勢物語初段を暗示する「若紫」という巻名からはじまる。更に、

わらは病にわづらひ給ひて、よろづに、まじなひ・加持などまゐらせ給へど……

という文からはじまる冒頭部分を読むと、この場面が、

伊勢物語初段　／　源氏物語若紫巻

男（業平）　／　光源氏

初冠して「成年式後の大人」　／　わらは「Ⅱ童」病

平城の京、春日の里「南」　／　北山「北」

狩「健康」　／　加持「非健康」

なまめいたる女はらから「若さ・女」　／

「北山の聖」（かしこき行ひ人・老いかゞまりて、  
の外にもまかです）「老い・男」

という図からも理解できるように、伊勢物語初段とは全く対照的に裏返ししたパロディであることが明瞭に語られるのであって、帚木巻の冒頭文のように草子地を用いて交野少将物語と比照して読み解くことを求められていないものの、かえって暗示的であるが故に、この巻を常に伊勢物語と比照して読まざるをえないことを強制されるのである。

（三谷邦明「藤壺事件の表現構造——若紫巻の方法あるいは〈前本文〉としての伊勢物語——『物語文学の方法Ⅱ』有精堂出版、一九八九年。傍線は引用者）

一九八〇年代『源氏物語』の研究にテキスト論の視座を導入し、確立させたのは三谷邦明であり、当該論文はその記念碑的な論に相当する。だが、一読して明らかなように三谷のテキスト論は、玉上がお膳立てをした正反対の思考方法を前提に論述が始発している点、看過されるべきではないだろう。すなわち「伊勢物語初段とは全く対照的に裏返ししたパロディであること」および「この巻を常に伊勢物語と比照して読まざるをえないことを強制される」という指摘はたしかに三谷の発展ではあるが、玉上の見解なしにはなしえないことなのである（3）。

それと同時に、玉上と三谷が指摘してみせた人物の対応の図式は、「若紫」巻の筋の進展とともに流動的であり、けっして固定的なものではないのである。その後の物語の進展とともに、初段との人物対応も変化してゆく。テキストとしての意味の生成を論ずる立場からは、そのことが大事なといえるだろう。

光源氏による垣間見は、次のように叙述されている。

日もと長きにつれづれなれば、夕暮れのいたう霞みたるにまぎれて、かの小柴垣のもとに立ち出でたまふ。人々は帰したまひて、惟光朝臣とのぞきたまへば、ただこの西面にしも、持仏すゑたてまつりて行ふなりけり。簾すこし上げて、花奉るめり。中の柱に寄りゐて、脇息の上に経を置きて、いとなやましげに読みあたる尼君、ただ人と見えぬ。四十余ばかりにて、いと白うあてに瘦せられた、つらつきふくらかに、まみのほど、髪のうちくしげにそがれたる末も、なかなか長きよりもこよなういまめかしきものかな」とあ

はれに見たまふ。

(205～206頁)

彼の視線の先に現れた対象は、意外にも「四十余ばかり」の「老女」であった。今度は一応「女性」であり、「性」は一致しているものの、光源氏の婚姻の対象からは大きくズラされている。さらに垣間見は続く。

きよげなる大人二人ばかり、さては童べぞ出で入り遊ぶ。中に、「十ばかりやあらむ」と見えて、白き衣、山吹などの萎えたる着て走り来たる女子、あまた見えつる子どもに似るべうもあらず、いみじく生ひ先見えてうつくしげなる容貌なり。髪は扇を広げたるやうにゆらゆらとして、顔はいと赤くすりなして立てり。

尼君「何事ぞや。童べと腹立ちたまへるか」とて、尼君の見上げたるに、少しおぼえたところあれば、「子なめり」と見給ふ。紫「雀の子を犬君が逃がしつる、伏籠の中に籠めたりつるものを」とて、「いと口惜し」と思へり。

(206頁)

ヒロイン若紫の登場である。内話文で「十ばかりやあらむ」と見え「とあるように、光源氏の眼には、十歳くらいと、実際の年齢よりも幼く見えた(後の北山の僧都との対話場面から、彼女の母親の死から「十余年」の経過により212頁、実際はもう少し上であることがわかる)。

つらつきいとらうたげにて、眉のわたりうちけぶり、いはけなくか  
いやりたる額つき、髪ざしいみじううつくし。へねびゆかむさまゆ  
かしき人かな」と目とまりたまふ。さるは、「限りなう心を尽くし  
きこゆる人にいとよう似たてまつれるがまもらるるなりけり」、と  
思ふにも涙ぞ落つる。

(207頁)

この年端も行かない「幼女」に心惹かれる理由は、最愛の女性藤壺の宮に面立ちが似ているという、彼女の形代性に拠る。

#### 伊勢物語初段／源氏物語若紫巻

なまめいたる女はらから「若さ・女」姉妹・適齢期の女性／

「北山の聖」(かしこき行ひ人・

老いかゞまりて、

室の外にもまかです)「古い・男」

←

「尼君、若紫」祖母と孫・老女と童女

(四十余ばかり・十ばかりやあらむ)「老・幼」

「なまめいたる女はらから」という婚姻の適齢期の女性に対して、老女と童女の登場も、「老」と「幼」という「反対」の思考方法からなせるものであり、当該三谷論文が「伊勢物語初段とは全く対照的に裏返ししたパロディ」だと説く所以だろう。

### 3 玉上琢彌の学問と散文の学としての近世の源氏学

さて「若紫」巻の冒頭の言説が、『伊勢物語』の初段を正反対に引用することで生成したものだとする玉上の卓見は、どのように導き出されたものであろうか。

公表された媒体の書名は、『源氏物語評釈』である。誰もが反射的に



想起するのは、近世の国学者、萩原廣道の代表的な著作『源氏物語評釈』（文久元年、一八六一刊行）なのではないか。まったく同じ名称の書物として、玉上の『源氏物語評釈』は、廣道の著を意識しているか、範として書かれたものと推察される。これは私の想像の領域の話になってしまいが、廣道の『源氏物語評釈』は、評釈と頭書の注とがセットになっている、[桐壺]と[花宴]で中断され、未完のまま刊行されている。対して玉上の著作は『源氏物語』五十四帖の全物語を批評と注釈（および現代語訳）によって隔々まで光を当てられている完全版完成版であり（全12巻別巻2巻という、途轍もない大著である）、廣道の志というか遺志を引き継いだものではないかと思われる。そうであるのならば、その廣道の、広義には近世の源氏学の考え方が、玉上の学問に活かされているであろうことは容易に拝察される（4）。

玉上琢彌が用いた「反対」の語は、実は萩原廣道が『源氏物語評釈』において端的に用いている術語である（5）。廣道によれば「此物語に種々の法則ある事」（総論の小見出し）、その一つとして提示されている（6）。そこにおける「反対」の概念には、「これは其事の反うへに相対ふをいふ。たとへば雨ふると日てると。夜と昼となどのごとし。其事同じからずといへども、表裏に相対ふをもて反対といへり」（頭書評釈凡例）という、きわめてシンプルな定義がなされている。

ちなみに他の法則も「頭書評釈凡例」の条で「主客、正副、正対、反対、照対・照応、間隔、伏案・伏線、抑揚、緩急、反復、省筆、余波、種子、報応、風論、文脈・語脈、首尾、類例、用意、草子地、余光・余情」の二十一を挙げるほか、「奇対」「結構」「伝文」等の語もみられる。「此外にもなほあれど、今は其大むねをのみ挙つ。他は准へてもさとするべし」とする。ただし、これらの術語は、廣道のまったくの独創というわけではない。惣論で触れられている、安藤為章の『紫家七論』や、

賀茂真淵の『源氏物語新釈』（惣考）で言及されている「漢文学の法則」を主とし古注等にあるものを取り込んで作成されているのである。いわば古注に国学者の注釈（契沖から鈴木朗まで）を追加した注の集成である。その意味において、広く近世の源氏学の範疇における思考方法だといえるだろう。

#### 4 廣道の閉じられた関係性と玉上の開かれた関係性

ただし、結論めいたことを先に述べてしまうと、廣道が同著で用いた思考と術語、方法論をそのまま『源氏物語』に適用しても、遺憾ながら玉上琢彌が描いたような「若紫」巻の冒頭言説の分析結果は導き出せない。まずそれを、当該『源氏物語評釈』の「若紫」巻および「末摘花」巻の記述から確認することにしよう。

「第五帖 若紫 評釈」においては、廣道は、真淵の『源氏物語新釈』を引用している。（なお、以下の引用における傍線は、引用者。以下同じ）

〔新〕紫を若紫てふことは、わかき根を用いる物ならねば理聞えがたし。思ふに、伊勢物語に春日野のわかむらさきのすり衣、とよみしは、女をたとへて「若草」といふべきを、紫草にとりかへて「若紫」といへりを見ゆ。しかれば、此巻の名は、いせ物語の詞を何心なく用ゐて「若むらさき」と名づけしのみなるべし。かのかいまみの事をうつして此巻に書しにてもしるべき也。

当該自身の「釈」は、次のとおりである。

〔釈〕若紫といふ名の事、ことわりをいわば新釈のごとくなるべし。然れども、これはただ藤壺女御のゆかりの紫、上のわかきほどをいふ巻なれば、かの「ねにかよひける」といふ歌を思ひて、なにとなく

つけしなるべし。かくて次のくれなゐの末摘花と反対にしたる也。

そのよしは末摘花卷に委しくいふべし。

真淵の『源氏物語新釈』の指摘を、そのままに踏襲してしまった時点で、廣道の切り口も、現代の注釈にも流布している「影響」の次元に留まる指摘と大差はない。しかし、ここには「反対」の術語が現れている、「末摘花」巻と「反対」であるとの指摘である（後述）。またこの「釈」に続けて「評」も、次のとおりに説く。

〔評〕此卷の発端いとゆくりか也。案に、夕顔卷の脈は末摘花卷にうけて続きたるを、此卷はなかなかかわらはやみの事より書出られたるは、例の案外に書まぎらはして、末摘花卷と前後をとりかへてあやなされたるものにや。細流、箋などに、夕顔卷に河原院にて靈氣にあひ給ひし故にわらはやみにわづらひ給ふよしに注せられたるは、さも有べきか。されども、文のうへにはさることかすかにも見えねば、猶いかが也。（以下略）

廣道も「此卷の発端いとゆくりか也」と、「わらはやみ」という思い掛けない、病気の記述から書き始められていることに注目している。しかし、廣道の思考方法は、『源氏物語』の「構造」を重視し、巻と巻との承接じたいの関係性に注意が向けられてしまうので、「夕顔卷に河原院にて靈氣にあひ給ひし故にわらはやみにわづらひ給ふよし」という方向に、理解が傾いてしまうのである。

次巻「第六帖末摘花評釈」は、「若紫」巻との関係性、「反対」が説かれている。

〔釈〕（前略）此卷は、紅の末摘花によりて名つけられたるは上の若紫と相對へたる物にて、巻中にて第一にめでたき人を、いともわろかめる人と反対にせられたるものと見ゆ。さるは此次の巻は紅葉賀と花宴と對へ、葵と榊と對へられたるにて、さる事とはしらるる也。

さて次々の巻どもも、大方はさばかりの心はせられたりと見ゆるが多けれど、又悉く然るにもあらざれば、みながらさやうにもいひがたけれど、作りぬしの心ありげに見ゆる名どもは、次々の巻にも注しつべし。見ん人、大かたは心得おくべき也。

〔評〕此卷は、若紫の反対に、いと古めいたる常陸宮の姫君の事をいはんとて、わびしくわるき事のかぎりをあつめて語るを主としたる事はいふもさらなる中に、発端の詞をば、かの夕顔のなつかしかりしを思し忘れず、いかでさるむぐらの門にあはれる人のあれかしと、しひてもとめ給ふ物好のの心より、思ひの外にくちをしき人を引出きて、わづらひ給へるよしに書なされたる反復の筆、いとめでたし。（以下略）

廣道の関心が『源氏物語』の静態的な「構造」の分析、とりわけ巻同士の承接関係にあったために、せっかく「反対」の思考を巡らしながら、「若紫」と「末摘花」という人物造形の「反対」の指摘に留まつてしまふのである（その指摘じたいは、むしろ評価されるにやぶさかではないが）（7）。したがって、萩原廣道の方法は、いつも『源氏物語』じたいの「構造」（静的・固定的な閉じられた「構造」のモデル）への適用にすぎなかった。閉じられた系への関係性の適用である。

対して、玉上琢彌の思考方法は、開かれたものとしての関係性にあつた。繰り返すことになるが、『源氏物語』「若紫」巻が先行する作物『伊勢物語』初段との関係性から、どのように関わっているのが主眼であり、その際、廣道が提唱した「反対」の概念を、「構造」としてではなく、動態としていわば「間テクスト」、引用として応用したことに尽きる。前掲『伊勢物語』「初冠」の段との違い」という見出しには、玉上の「読み」の姿勢が端的に示されており、廣道の「反対」の術語が、思考方法として、もつとも有益に適応されている、模範的な応用例だとい

えるだろう。

さて小稿の標的とするのはここまでであるが、長らく右のごとき思いを温めてきた私は、このような思考方法は、『源氏物語』以前の散文作物への適用も可能ではないかと思うようになっていた。「令和」への改元を機会に、新元号が『万葉集』の序文部分（散文）を典拠としていることに目を付け、従来、万葉集研究の専門家からは「文飾」に過ぎないものとして軽視されてきた「帰田賦」引用を、「反対」の思考から説いている（8）。併せお読みいただければ幸甚である。

#### 注

- (1) ちなみに学術団体物語研究会の「年間テーマ」を振り返ってみると、一九八二年が「インター・テクスチュアリティ」であり、翌八二年が「方法としての〈引用〉」となっている。
- (2) 当該論文において三谷邦明は、「若紫巻と伊勢物語初段とを比照するのだが、玉上琢弥の比較は若紫巻の冒頭部分に限定されて」という批判をしている。
- (3) 小稿の標的はあくまでも『源氏物語』『若紫』冒頭の人物設定の対応から「若紫」巻始発部分のテキストの生成を説くことにある。対して三谷邦明の論の趣旨は表題にも明らかのように、「藤壺事件」を主眼とし、広く『伊勢物語』の引用によって「罪」の生成等を論じた画期的な論だが、小稿の狙いとはまったく異なる。
- (4) 江戸の注釈の学問の受容という観点から、玉上琢彌の学問（の形成）を考えて観る必要があるだろう。玉上（一九一五年～一九九六年）は、京都帝国大学の国文科を卒業。同学の一回りほど先輩に、中国文学者の吉川幸次郎（一九〇四年～一九八〇年。中国文学科卒業）がいる。吉川には、自身の学問形成に関して江戸の注釈の学問

が基盤となつていることを説いた著作があり、たいへん示唆的である。それは、「万葉と古今」、「注釈の学」、「辞典の学」ほか『古典について―あるいは明治について―』（吉川幸次郎全集第十七巻）筑摩書房、一九六九年。単行本『古典について』筑摩叢書63として、一九六六年に刊行されている。所収一連の随筆は、江戸の「注釈の学」に象徴されるの学問の厚みと急速な欧化・開化に迫られて成された明治の「辞典の学」の薄っぺらさを批判しており、興味深い。

- (5) 阿部好臣「反対」（「表現・発想事典」秋山虔編『別冊國文學源氏物語事典』學燈社、一九八九年）、同論により私は初めて萩原廣道の源氏学の中身を知った。

- (6) 萩原廣道『源氏物語評釈』本文の引用は、鷲沢伸介による『源氏物語評釈 翻刻（版本十四冊）』のネットページによった（初稿2008.9.24、最終改訂2014.8.19）。

- (7) 野口武彦「注釈から批評へ―萩原廣道『源氏物語評釈』をめぐって」『源氏物語』を江戸から読む』講談社、一九八五年。同論で野口は、「…「反対」という語句は、広道が日頃親しんでいた中国白話小説、なかんずく『水滸伝』の批評から得た用語の一つであって、まったく相反する性格の作中人物を組み合わせるコントラストの手法をいう」という指摘をしている。

- (8) 東原伸明「梅花の宴歌群と序文および関連歌群のテキスト分析―もしくは散文としての『万葉集』とその間テキスト性―」（東原伸明／ローレン・ウォーラー／ヨース・ジョエル／高西成介編著『万葉集の散文学―新元号「令和」の間テキスト性』武蔵野書院、二〇二一年）。

（ひがしはら のぶあき・本学教授）